

「資料」

## 資本主義と近代国家

E・ホブズボーム

市川 泰治郎 訳

マルクス主義歴史学にはこのところ紹介すべき大きな収穫があまりなかった。したがって、ペリー・アンダーソンの二部作\*の公刊は非常によろこばしいもので、私は『タイムズ』文芸欄でも既に書評したが、ここでもとりあげ、また今後とも大いに論評してみたいと思っている。これはたいへん重要な著作である。

\* 末尾の訳者注(4)参照。以下それぞれ『系譜』、『通路』として引用する。

『ソシアリスト・レジスター』1975年版でラルフ・ミリバンドが同書を批評した言葉を借りていえば、「アンダーソンの命題中には留保あるいは批評せねばならぬものもあるが、しかし史的唯物論の方法による偉大な歴史的貢献であり、マルクス主義歴史記述としては一頭地をぬきこんでた二部作である」。

ただし同時にこの批評がいささか厳しいものになるだろうと断っておかねばならない。それは長年にわたりイギリスのみならず国際的にマルクス主義の世界で続けられてきた論争のなかに同書を置き、その文脈で批評を加えようと思うからである。その文脈とアンダーソンの狙いとはともに主題を同じにしているというわけではない。いうまでもなく、アンダーソンは国家の問題を主題にする。それに反し、かの文脈は生産諸様式の性質、先資本主義諸様式間の移行および最後に封建制から資本主義への移行を焦点とするものである。それゆえ、この二部作をあたかも論争の主題にかかわっているかのようにあつかうこ

とはいささか不当ではある。しかしながら、国家の役割一般および特殊的には絶対主義国家の役割にかんするアンダーソンのこの論作が、もしも——人類はどのようにして原始共産制から資本主義へ進み、さらにそれをも越えてゆこうとしているか——という唯一最大の問題の解明に役立たなければ何の意味もないのである。これは不当な言ではないと思う。

## 1. 生産様式論

この論議には甚だ長い歴史がある。しかしここでは第二次世界大戦直後におけるモーリス・ドップの『資本主義発展の研究』から始めよう。同書は封建制から資本主義への発展の問題をとくにイングランドの事例において、詳細かつ論争的に論じたものである。この研究以来、数多くの討論が始まり、その最も有名なのは（但しいまより資料不足であったから最良のものとはいえない）いわゆるドップ＝スウィーギー論争である。これは1950年スウィーギーの提起した批判に発端し、イギリス、日本、やがてはフランス、イタリアのマルクス主義者も加わったもので論争の主眼は14世紀に封建制をみまった第1回の明瞭な危機あるいは崩壊と、資本主義の生長、繁栄——18世紀のような——とに挟まれた中間期の性質にあった。この問題を土台に、さらに一連の議論の深化がみられる。その中心は、しかし、封建制危機に絞られた。たとえば封建制が分解へ向かった理由は何か。その分解ないし構造再建のあいだに何が起こったか。議論はさらに進んで上記の中間期を(1)14—15世紀の封建危機段階、(2)16世紀の封建制更新拡大段階（その厳密な性質はまだ未確定であるが、今日ウォラースタインのごときはこれを絶対的決定段階とみている）、(3)17世紀の一般的封建制危機の段階の三副段階へ区分する。17世紀危機から資本主義の直線的発展、すなわち産業革命への驀進が起こる。この論争はほとんどイギリス学界で行なわれ、かつ、少なくとも中世後期にかんする部分では非マルクス主義歴史学者が相当に活発であった。

次いで1950年代なかばからスターリン主義の没落にともないマルクス主義の

イデオロギー構造に、当時喧伝されたような、きわめて大きな雪解けが起こり、資本主義の歴史的起源の問題にも新しい、かつ遙かに広範な要素を導入した。その限りでは論議はむしろもとへおしもどされる。ひるがえって、大部分の議論の基礎をなしてきたのはマルクスの『経済学批判』への緒言における独創的な一節であった。それは原始共産制のあとへいわゆる東洋的生産様式、奴隷制、封建制および資本主義を生産様式の発展における4つの累進的劃期として挙げた一節である。それがスターリン時代には政治的その他いろいろな理由で単純化され、1930年代には東洋的あるいはアジア的生産様式が削除され、奴隷制生産様式の単純なモデルを拡大し定着させようと試みられた。レーニンが奴隷反乱にたまたま論及したのをスターリンは巧みに捉えた。当時の学説は奴隷所有者にたいして奴隷が放った革命の矢によって古代奴隷制生産様式は崩壊したなどとし、マルクスの提起した全問題はいわば凍結された。それがいまは全く雪融けしたのである。

この雪解けの進行過程に重なって、それまであまり利用できなかったマルクスの『要綱』もまた人びとのものとなった。1950年初めに最初の体裁をなした公刊があり、1960年初めに関連箇所（すなわち「資本主義に先行する諸形態」の部分）の最初の英訳があらわれ、これによってもまた新しい解釈の可能性が加えられた。この新解釈の中心問題はアジア的生産様式の、いわゆる再発見であった。これは当初はフランス、ハンガリーなど若干の地域における論議を主たる中心にして始まったものであるが、やがて国際的に発展した。マルクスの前述の生産様式のうちでは恐らくこのアジア的生産様式にたいし過去20年あまりの間に最も集約的な、かつ大量な文献があらわれている。同時に、古代生産様式——すなわちギリシャ、ローマの奴隷社会にかんする再検討も盛んとなり、奴隷制はあらゆる社会が通過した普遍的段階ではなかったという事実が、ソヴェト同盟においてさえ、ついには承認された。そして、最後に来たのは封建制で、新しくその性質と定義にかんする疑問と論議とが起こった。イギリス共産党歴史部会は『マルクシズム・トゥーデイ』誌と共催で1960年代初めにこの問題にかんする一連の討論を組織し同誌上にいくつかの論文を載せるにいたっ

た<sup>4)</sup>。それを読み直せば、そこには当時の、少なくともイギリスにおける研究状況が明らかに示されている。

最近、1960年代から引つづいたこの人類社会発展の時代区分ともいべき論議のなかへ新しい要素が加わってきた。

それは「第三世界」革命を機縁として、「第三世界」革命にたいする関心から出発した。これにかんして、いまや一連の論議がある。そのうちラテン・アメリカにおける初期植民地体制の性質にかんするアンドルー・グンダー・フランクの著作が最も有名であるが、近刊のイマニエル・ウォラースタイン『近代世界体制の源流』は恐らく最も重要なものといえよう。これらの諸著は次の見解に立脚してそこから議論を起す。すなわち世界の特定部分たる「発達した世界」の発達はじつに、それ以外の部分にいわば負ぶさったものであり、一部分における発達は他の諸部分の未発達、未開発のもとをなしており、この体制においては特定の全地球的位階層制秩序いうならば階層制固定化が、このようにして定着されている。かような世界経済体制が研究対象なのである、と。

このような背景からみて、1960年代末から70年代初めにわたり社会発展段階、構成移行の問題に全マルクス主義的討論の花が俄に開いたのも恐らく意外ではなからう。諸国において実に数多くの本が書かれて、何らかの形で全体の見通しをまとめようとしている。そのなかでも、ペリー・アンダーソンの著述は明らかに最重要なもの一つ、いや恐らく、今日までにおける唯一の最重要労作であろう。

以上がわたくしの第一の背景描写である。これらの論作があらわれてきた歴史的状况の少なくとも若干を確めておくことは大切である。それらはまさに二つの種類に分かれる。ただし一方の型のほうが支配的ではある。それは、ゴードン・チャイルドがかつて、その著書の表題に選んだ疑問点——すなわち「歴史において何が起こったのか」を根本問題としてとりあげるものである。原始共産制は、どのようにして、アジア的生産様式、封建制あるいは最も適当と思われる他の名称で呼んでよいものの、何れなりとへ、どのようにして移行したのか。封建制はどのようにして資本主義へ移行したのか。封建制を瓦解させ資

本主義を生成させたのは封建制のどのような性質なのか。などなどである。しかし同時に、概念の問題もまた当然避けて通ることはできなかった。すなわち社会経済構成とは厳密にいつて何なのか。生産様式とは何か。生産様式の内部法則とは何か。などなど。この二種類の主題は全く同じことであるとは、とくに現在のところでは、いえない。この点は重要である。「歴史において何が起こったか」という問題と「生産様式とは何か」、あるいは「14世紀末ないし15世紀のヨーロッパを何と分類すべきか。それは封建制か資本主義か、前者ならば没落期封建制かそうではないのか」というような他の諸問題とを区別しておきたい。このあとの種類の問題も、もちろん第一のと同じくある意味で絶対的に解答を必要とするものである。けだし、いかなる分析も分類、時代区分および形態区別を含まざるをえないものであるから。しかしまた形而上学的議論でないかぎり、歴史において何が起こったか、いいかえれば、洞穴に住んでいた時代から出発して1975年の今日、この室にすわっている人びとにまで人類がどうして発達してきたかという疑問からそれを全く切離すことはできない。しかし、どのようにして原始共産制が少なくとも世界の一部分では発展して、つい一方においては高度に技術化した現代官僚制資本主義があり、他方においては社会主義が、世界のその他の部分すなわち第三世界を転形させつつある今日にまで発展したのか。この問題は、しかし、生産様式とは何かという抽象的疑問からは切離してもよいのである。

ここでヒンデスとハーストの共著、『先資本主義生産様式』（ロンドン、1975年）について一言ふれておきたい。同書は上述の切離しが可能であることをきわめて明晰に論証しているように思える。もちろん同書は先資本主義生産様式に全巻を費している一方で、これら諸概念の目的は「具体的な歴史的諸社会の研究にとっての用具として、あるいは研究装置として役立たせること」にあるのではないとはっきり述べている。(308ページ) また「歴史研究は科学にとってのみならず政治にとっても無価値である」ともいっている。(312ページ) したがって生産様式の研究は論理的には、一般にいうところの歴史から切離すことが十分にできるものと思えるのである。かつまたじっさい、アルチュセール

派のような極端派（と私は思う）のあいだでは現在だけがマルクス主義的分析の適用可能な唯一の歴史的部分であり、したがって、過去を論ずるにあたっては当然、既成の名称の生産様式をどれでもとりあげて、適合した構図を得るまで自由に使用してよいことになる。もちろん既成概念がその構図にあてはまるかどうかは判らない。このような形而上学的あるいは抽象的方法が無価値だとはいわない。じつにハーストらは過去のマルクス主義論議を分析してみて、そのうちきわめて正しい諸点を明らかにし、上述した議論の一部に批判を放っているのである。たとえば、これはわたくし自身も示唆したところであるが、マルクス主義は単線的発展論でないばかりでなく、生産様式の特定な継起にも必然性がみとめられないとまで、余り強くはないけれども、いうのである。さらに、資本主義生産様式概念には、封建制がその先行形態でなければならないとすべき内容はひとつもないと耳を傾ける価値ある論争を試みている。もちろん、そうだからといって現実の歴史においては、資本主義は実際には封建制から生成したものであるから、どのようにしてそれが生成したか、なぜ封建制は崩壊したかという問題が重要性を失なうというわけではけっしてない。

さてマルクスの理論的モデルの問題は以上に止めるとして、次のことははっきりさせておきたい。それは、真の歴史、具体的な歴史、何が本当に起こったのか、なぜ起こったか。また何が起こらなかったか。なぜ起こらなかったかは、まさにマルクスの、かつまたわれわれの中心問題であり、それは政治的にも、また純理論的にもまた正しい問題提起である、と。また、そうでなかったならば、マルクスは『資本論』のなかで大きなスペースを割いて歴史問題を概説することはしなかったろう。いろいろな生産様式の組成と起動性を分析する目的は分類学の構築にあるのではない——生産様式のありうべき種類の列挙表をつくることは、それだけの価値はあっても当面の目的ではない。一部の極端な理論家の考えとは反対に、現実の歴史から出発して、またそれへ帰ることが大切である。人類社会の多面的な、不均等な複雑な発展の説明がいまの目的である。その点ではアンダーソンの生産様式および社会構成の論じ方は、いわば正統的伝統の線に沿っているとしなければならぬ。かれがとりあげるのは真に

生起した事実であり、その本質的理由であり、純粹抽象的区分ではない。もっとも、同書を読むときの楽しさは、かれが理論からつねに目を離さず、自分の仕事の意味——いろいろな説明の理論的意味を弁えているところから生まれてくる。

## 2. 前封建的生産様式の諸問題

アンダーソンは以上各種の生産様式にかんし、アジア的生産様式にかんし浩翰、精細で優れた検討を試みて、「ヨーロッパの社会発展の教説が定説化されたあとに久しく遺された画一的な残基的範疇があるが、非ヨーロッパ的發展をそれへ還元することはどのようにしてもできない」という点を論証している。（『系譜』548—9ページ）この論証は正しいと思う。わたくしは、この意見に支持を与えたいと思う。いいかえれば、ヨーロッパで封建制が發展したのに反して、アジア全体はそのような發展を遂げることのなかった単一種類の古代生産様式にとどまっていたとみた点において、あまりきめつけてしまってはならないが、マルクスは間違っていたと思うのである。しかし、いうまでもなくアンダーソンのこの研究の目的は、「現実の生産諸様式の複合的結合と継起とがこれらヨーロッパの外にある広大な地域の実際の社会構成を規定した」とし、この生産諸様式を分析するうえの準備をととのえることにあった。（548ページ）

また、かれは封建制概念の分析にあたり、きわめて有力なある種の批判的諸方法を用いているようである。かれはここでも否定的で、単一の全世界的現象としての封建制というようなものはないと考える。ここでの目的もまた同じで、ヨーロッパ型封建制にのみ見出される諸要素を選定し、それがヨーロッパで、しかもヨーロッパにおいてのみ資本主義の発達を許し、あるいはその発達の原因となったというのである。——おそらく日本だけが例外的にヨーロッパに似ていたのである。かれの議論の眼目は原始社会から資本主義への完全な發展は、好むにせよ好まぬにせよ、世界の一角、すなわちヨーロッパにおいてのみ起こったという点にある。したがって世界中どこにも封建制が存在したとし

て、ヨーロッパ以外ではなぜ資本主義が起こらなかったかという説明をくださるか、それとも、このほうが公算が多いのだが、この種の幅広い、何でも式の分類をやめたほうがよいということになるか、どちらかである。

わたくしの見るところではアンダーソンはやや行過ぎている。アジア的生産様式とちがって、封建制には全世界的現象だと見てよい点があり、これを掘下げることが必要である。しかし、それでもアンダーソンの議論の根本に間違いはない。封建制をもって原始社会の解体から生じたもの、あるいは先進社会の退行または分解から起こったとも考えられるものとして分析できるにしても、この特殊な生産様式それじたいから資本主義発達の理由を説明することは不可能である。なぜならば世界の多くの地域においては封建制から資本主義の発達をみたことがなく、また発達過程にあったともみられないからである。したがって、ヨーロッパ型封建制またはヨーロッパの経験の特殊性を解明し、それによる説明を試みる仕事がまだ存在しているのである。

他方、残念なことに、アンダーソンは古代奴隷制生産様式にかんしては、それほど鋭く十分な分析を加えていない。ここにかれの議論の断層があるように思う。かれは古代の遺産が西ヨーロッパの特定な封建制に連結されたことが、まさしくヨーロッパの発達における特殊性の説明になるとしているのである。それゆえ古代社会にかんして十分な知識を与えることが、かれの仮説にとっては絶対必要なこととわたくしには思われる。そうではなからうか。

しかるに古代社会にかんするかれの論述は封建制のばあいにくらべて遙かに粗略である。そこには若干の空白もある。また、かれの論述だけでは、それが果して奴隷制を本質的特徴とした社会構成であるとどこまでみてよいかさえも疑われる。私は奴隷制社会とみてよいと思うがこの点についての疑問がこれまでもある。さらにまた、古代的生産様式とその没落のあいだの連鎖、封建制と資本主義発達のあいだの連鎖は議論のなかで随所に出てくることであり、中心点なのだが、もうひとつ、はっきりしない。議論のなかに浮んでくるのは古代から遺承した思想、制度、類型——特定なイデオロギー的文化諸要素——の存続が、西方に発達した封建制の具体的な型を、まずある意味で、形成したの



であり、その後もその発達につれて封建制に随時栄養を与えてきたということである。本当にかれがそう解釈しており、また事実そうだとしたならば、ここにあるだけの議論では不満足だとせざるをえない。

もちろん、アンダーソンも純政治的要因が働いたことは認めるであろう。古代的（ギリシャ・ローマ的）生産様式はオリエントの他の地域では見られなかった結果を招いている。すなわち永くつづいた帝国が崩壊したのちは、ついにその再生をみることがなかったのである。この事実にかんするかぎり、それは封建制の発達に直接的影響を与えたにちがいない。思え。中東以遠の大部分の古代オリエントの諸帝国——ペルシャ、インド、中国。なおビザンチン帝国を加えてもよからう——は何らかの形で永い生命を保ったのである。崩壊し、解体したが、しかしやがて再建され、ついに19世紀にいたるまで、形態は別としても、存立していた。しかし、帝国にも特殊の型があり、その最も顕著なものとして西ローマ帝国は短期間に興起し強大を誇りやがて崩壊したのちは、再び蘇ることがなかった。もっともアンダーソンのいっているとおりの帝国のある種の伝統はキリスト教会その他を通じて維持され中世には絶えることなく続いているのである。しかし、帝国の再現は見られなかった。この点については他の場所でまたとりあげることにしたい。

### 3. 西方封建制の起動性

特殊西方的封建制の起動性の問題になると、アンダーソンの論旨もあまり独創的ではない。けだし、西方封建制研究の一特徴として、全体的にみた時間的長さ、時代区分、および多くの実際的データについてはほとんど議論の余地がない。たとえば、10世紀から13世紀のあいだにおいて、人口、生産、貿易などの非常な増加があったことは周知のところである。14、15世紀に一大危機があったことなどもほとんど明瞭である。問題の分岐点は解釈の仕方にある。アンダーソンを読んでみると、西ヨーロッパおよび南ヨーロッパの資本主義の起動性は四つの要因に根ざしているという。すなわち、社会を支配していた農業部

門における領主と中小農民，都市およびやや消極的要因であるが政府これである。西ヨーロッパに固有の特性は——こういっても過度の単純化に走りすぎてはいないと思うが——次の点にある。すなわち帝国の欠如，都市の独立性およびある種の側面における領主の権利の制限，これである。このうち都市の独立性という点はアンダーソンも力説しており，そのとおりであるが，しかし別に新説ではない。ただ，領主権の相対的制限にかんして，かれは他の学者よりも高くその特殊性を評価している。ヨーロッパ以外の多くの封建制では直轄領農業にはあまり大きな障碍はなかった。すなわち領主のエステートの一部分が領主により，その経済のため農奴労働によって耕作された。かれによれば経済成長の起動性は，（非常に長く複雑な論述を簡略にしてよければ）直轄地，水車，風車のような独占的技術および農奴の直接搾取の組合せにより収入を図る，ある意味での企業家たる領主と，保有する土地を改良する余力と意欲をもつ農民との双方から生まれている。領主，農民の双方ともほぼ紀元1000年から1300年のあいだに耕地面積の大拡張をみた土地を対象として沈黙の闘争を展開したのである。都市の独立はその内部にブルジョアジーの生長を許した。農業収入の増加——とくに一人あたり市場需要が他よりも大きい領主のあいだにおける増加——は都市の発達を助けた。そして帝国——すなわち官僚制をもつ有効な国家——の不在は社会集団がおのおの，できるだけ資源配分を変えることなく，経済を自由に発達させることを許したのである。

大体，そうした見方が妥当だと思う。しかし，若干の問題は，まだ明らかでない。たとえば，この特殊な農業経済がいわゆる暗黒時代において何故それほどの技術的起動性を具えていたか。果して実際にそれほどの技術的起動性をもっていたのか。最近では，誰しもが水車やカラー型馬具などこの種の発明を指摘するのが習いになっているが，他の数多くの農業経済において，たとえば中国農業においてこれに比較できるような技術的起動性が事実見られるのではないか。もっと重要な問題は，この特殊な経済において封建領主が直轄地耕作，荘園工場などをもつ一種の農業企業家に転身した理由は何かである。他の地域でも起こったろうか。どうも他ではこれほど大きな転換は起こっていないらし

い。では、なぜこの特殊な事例においてのみ、起こったのか。この問題については分業、局地市場および地域間市場、交易類型の発達という、もっと大きい問題もとりあげずにすむだろうか。都市の再生はこれらの発達の結果である。

もちろん、この点はマルクス主義者のみならず全研究者にとって永く謎となってきたことである。この論争の全体にわたって、その背後にいわば幽霊のように人びとを捉えている議論がある。その一つはドップにまで遡れる。封建制から資本主義へのみならず大部分の構成移行にかんする議論にはつねに二つの傾向がある。一つは経済の性質が変わったのではなく主因は貿易と市場とにあったとする見解である。もう一つは、貿易の役割は別として、交易視点はマックス・ウェーバーの持論のように、古代エジプトにも貿易業者や銀行業が存在していたのだから近代資本主義の厳密な特殊性を決定するうえには十分でなく、やや妥当さを欠くものであるとし、生産視点をとって生産点における正確な関係をきっちりと見る必要があるというものである。とにかく、この「生産主義者」と「市場主義者」とのあいだには、過去30年間、その時の政治状況に対応して間断ない対話が（双方とも重要な要素であるため、しばしばそれぞれの内部での対話も）続けられてきた。伝統的に正統マルクス主義見解とされているのは、明らかにドップに代表されているもので、生産の側面を強調してきた。そのもとは1920年代、30年代のソヴィエト同盟における商人資本主義否定論に遡れる。この生産と市場の二要素がつねにいろいろな比重で結びついてくる二重性は、じつに当面の移行論争を考えるにあたって、念頭から離してはならぬものである。この論争の延長線上に最近の所産としてアンダーソンの二部作があるのである。

この起動的な膨張が起こったことは認められるが、しかし資本主義の直接原因となったろうと推定できる状態が、どれほどこの膨張の結果として起こったのか。それについてはあまり論じられていない。ただ、14世紀において、一部のイタリアおよびフラマン地方の都市に資本主義の飛び地とみられるものが発達し始めていたようである。わたくしも明らかにそうだと思っている——マルクスは、はっきり、そうだとしている。この発展のあとに封建危機が訪れて

くる。この危機が多くの論議の的となったもう一つのエピソードである。ただし、ここでアンダーソン自身の封建危機論をとりあげようとは思わない。しかし、この危機については、かれにきわめてブリリアントな解釈がある。少なくとも、その一つを引用しておきたい。引用するだけの価値ある一節で、こうである。

「……マルクス主義者間に広く信じられているところとは反対に、生産様式の危機の特徴的『形相』は、強力な（経済的）生産力が逆行的（社会的）生産関係を破って爆発し勝利を占め、その廃墟のうえに高次の生産性と社会とを直ちに樹立することではない。逆に、生産諸力は既存の生産関係の内部に停滞し退行する傾向をもつのが典型的な過程である。生産関係は、そこでまず、自ら根源的に変革再編成されねばならない。そののちに新しい生産諸力がつくりだされ結合され、そのうえに世界的にみて新しい、生産様式の形成が可能となる。いいかえれば、移行の劃期においては、一般的に、生産諸力に先立って生産関係が変わるのである。その逆ではない。」（『通路』204ページ）  
一般的封建危機は後退<sup>リセッション</sup>へとみちびいた。社会的生産関係がもう一度、いわば訂正されたのちに初めて、生産諸力が前進を許されたのである。

これが一般的危機に妥当する真理ならば——その当否を試みる機会が恐らくわれわれの生きているうちに来るだろう——それは、はなはだ重要な点である。しかし、最初にことわったとおり、構成移行はアンダーソンの主題ではない。したがって、わたくしの批評はある意味では一部、的外れであるかも知れない。かれの主題は国家にある。ところで、この段階において、かような分析の政治的側面という、この種の議論にふくまれる多少とも重要な他の要素について一言しておくことを許されたい。激越なマルクス主義分析では政治的要素が支配的である。かれらの分析は特殊な政治的主張を立証するためなのである。かれらはアジア的生产様式の観念を捨ててしまった。なぜならば、インド人は1917年ペトログラードのボルシェヴィキ革命の型をインドに持ちこんではならぬといっているがこのような「アジア的例外主義」を正当化するものは一切困るからだ、とかれら自身告白している。

しかし、健全なマルクス主義論作でもなお、この政治的要素すなわち研究対象には政治的側面があるという考え方がつねに介在する。極端な一例をとると、あまり良い例ではないが、1960年代のグンダー・フランクがそれである。（『ラテン・アメリカにおける資本主義と低開発』、1968年。）開発が低開発を招きラテン・アメリカに見られる植民地社会の性格をつくり出すという理論は、ラテン・アメリカにおける公認諸共産党の政策を否定しようとする議論すなわち政治的議論から直接に生まれたものである。公認の党政策は幅広い——いわゆる民族ブルジョアジーとの——反帝統一戦線の政策であり、後進的封建地主寡頭制といわれるものと帝国主義との同盟に向けられる民主改革をめざしたものである。これに反対して鋒起主義を主張する人びとは、ラテン・アメリカではブルジョアジーが既に支配階級であることを分析立証するのが自分らの任務であると信じた。かれらによれば、ラテン・アメリカはスペイン人による征服の時に遡って、そもそも最初の農園も市場のためのものであったのであり、その植民地体制はいまだかつて封建制であったことはない。最初から封建制は存在していなかったので、封建主義者もいなかった、という。

このように、マルクス主義的社会構成論にたいして興味ある寄与たる著作と特殊の政治状況とのあいだには見る人にとってはまことに判然たるつながりがある。アンダーソンのばあいには、実際の史料を歪めた跡が全くない。理論についてはもちろんである。一つにはアンダーソンのほうが歴史理解にすぐており、史料の渉猟も広いゆえ、この分野においてフランク以上の成果をおさめている。フランクもきわめて才能があり、部分的には非常に優れた考え方を示している。しかし、重要なのは問題の選び方である。特定の主題をとりあげるとき、人は疑問点とそれに関連した諸側面を選び出す。アンダーソンのばあい、第二部の序文で国家を主要論題に選んだ理由について述べ革命とは政治的なものであって経済的なものでも文化的なものでもないからだという。そして、また「階級が存在しているかぎり、生産関係の根本的移行を決定づけるものは国家の建設と破壊とである」（『系譜』11ページ）からだともいっている。

もっとも、この一句はどちらかといえば、ずいぶん煮つめた、以心伝心的な

ところもある定式化なので、私自身にも果して真意を捉えているかどうか、自信はない。しかし、第二に、かれの二部作の主要論題——すなわちヨーロッパ史の特殊性と、その内側における、数世紀にわたる東ヨーロッパと西ヨーロッパのちがい——は、一つの大きな政治的結果を生むものであり、かれもそれを自覚している。かれによれば、ブルジョア国家は西ヨーロッパないしは一部の中央ヨーロッパ（ドイツが或る意味ではブルジョア国家の色彩のほうが濃い事例である。）においてのみ生起したものである。ソヴィエト革命が打倒したのは封建絶対主義国家であった。他方、ブルジョア国家——グラムシのことばでは、「市民社会」ならびに国家——が存在したところでは1917年に続く革命期においても革命勢力に対抗して勝利をおさめている。ロシアで打倒されたのは資本主義国家ではなかった。それゆえに1917年のロシアの経験は資本主義国家を打倒するにはどうすべきかという問題の導きにはならない。議論はそのように展開されるのである。

ここから、いろいろな政治的、戦略的、戦術的あるいは理論的結果が、極端に穏健なものから極端に鋒起主義的なものまで生まれてくる。もちろん、どの国にも妥当しうる方式があるわけではない。ただ当面の政治にかんする論争や問題点とのつながりがここにみられるということだけは指摘しておきたい。だがしかし、アンダーソンのこの側面はとりあげないことにする。むしろ、かれの関心の中心ではなかったと思われる問題、すなわちブルジョア社会への移行の経済メカニズムという点に集中することとしよう。したがって、絶対王政という特殊な主題をとりあげ、前記二つの異った角度からこれに接近する二つの道があり得ることを検討してみよう。それは同じ主題について、マルクス主義者のあいだにおいてもどのように違った見方がありうるかという一例を示すものでもある。

#### 4. 絶対主義にかんする二つの見解

絶対王政は、まさに、アンダーソンの二部作の主要論題であり、これを研究

対象に選んだ理由はいくらかもある。しかし絶対主義が資本主義経済の発展に演じた役割の問題にはやや別のものがある。アンダーソンが主たる力点を指向させたのは絶対主義国家の階級的な性格であり、かれはそれをその時代においては封建的基礎をもつものであったと見ている。今日、大部分の人はかれに同意するであろう。かれは、それを（エンゲルスなどの見解に反し）階級を超越し、いわばその上に独立に浮んでおり、新興ブルジョアジーと没落してゆく封建国家とのあいだの均衡をとった国家であるという捉え方を否定する。それは根本的に封建制のものであったという。

それではヨーロッパで16世紀から18世紀までのあいだ支配的であった絶対主義国家が、どのようにして資本主義移行に寄与したか。この問題について、かれの語るところは次の点に尽きる。

第一。絶対主義が常備軍を発達させた結果、国家は征服によって剰余を蓄積する能力を高めた。しかし、かれも認めているようだが、蓄積を助け得るにしても必ずしも現実にそうだったとはいえない。そのみならず、絶対主義は歴史上、資本主義国家の侵略戦争から発明されたものではない。18世紀のイギリスはどの国よりも多く侵略戦争を行なったが、そのときはもう絶対主義国家ではなくなっていた。

第二。絶対主義国家は、租税を手段とし、利益めあてに官職を買取った官僚群を主たる機関として、剰余の大きな部分を潜在的顕在的なブルジョアジーの手中へ収めさせることができた。かれの指摘どおり、このような方法で富を蓄積した人びとは、立場上、封建的利益を護るものとなった。かれによれば「絶対主義官僚制は商業資本を興隆させたが同時にそれを抑止した」（『系譜』34ページ）のである。

第三。重商主義諸政策が絶対主義の手段になった。これを力説するのは正しい。重商主義は、もちろん、単一全国市場の構築と産業的發展を目的としたものである。これが明らかに決定的な点であった。アンダーソンがいうとおり、それは絶対主義のブルジョア的転形よりむしろ封建社会内部におけるブルジョア分子の懐柔であったがしかし、同時にそれによってブルジョア要素を強力な

ものにした。ブルジョア分子にしてみれば、商人資本も製造工業資本も機械制生産の特徴たる大量生産の基盤をもつものではなく、したがって封建農業秩序にたいしてラジカルな訣別を告げる力はなかった。それゆえ、このような政策から利益を受けたのである。

そのとおりではある。しかし第一に重商主義は必ずしも絶対主義を必要としたものではない。商業都市は重商主義であり、ピューリタン革命以後の17—18世紀のイギリスは積極的な重商主義であった。アンダーソンはフランス絶対王政のスポークスマン——デュク・ド・ショアスール外務大臣——のことばを特に引用しているが、それはその当時における絶対王政と資本主義発展のあいだのつながりがどのように脆弱なものであったかを示している。次は、そのことばの、少なくとも主要部分である。

「植民地は海軍に、通商は植民地に、国家は大量の軍隊を維持し……最も栄光ある必要な企業を可能にする能力を通商に、それぞれ、依存するものである。」（『系譜』41ページに引用）

絶対王政は海軍でも植民地活動でも、通商でさえも、オランダあるいはイギリスのような非絶対主義国家のそれにくらべて勝っていたとはいえない。絶対主義国家は確かにこれらの諸手段を最大限度まで利用した。したがって、絶対王政は資本主義発展と不適合なものではなく、もし十分な資本主義発展があったばあいには、それさえも利用し得たであろう。しかし、それだけでは、なぜ絶対主義国家が資本主義発展にとって絶対必要であったかという理由にはならない。もちろん、これ以外にアンダーソンはいろいろな文脈で絶対王政について語っているが、それらについては、ふれない。

さて、全く同じ問題にたいしてアンダーソンとは対立的な接近方法があることに眼を向けてみよう。これはある意味ではかれの方法を部分的に補うものになってはいる。それは近代世界体制の諸源流を論じたウォラースタインの前出書の示唆する方法である。ウォラースタインの歴史知識は明らかにアンダーソンに劣り、しかもその歴史知識を吸収し消化している点でも遙かに及ばない。しかし、ばあいによってはそれは、きわめて有益な論作になっている。



いうならば、かれがじつに秀でたモデル構築者であるからである。かれの示唆するところによれば、高度の分業を基礎として、小共同体以上の大規模な経済を組織するには二つの方法しかない。それは、いってみれば、「世界帝国」と、「世界経済」とである。「世界帝国」といっても全地球をおおう必要はない。中華帝国はその世界の外部にあるものは「蛮夷」であったという意味で「世界帝国」をなしていた。世界帝国と世界経済が本当に全地球規模のものになったのを見るのは20世紀が初めてである。ここでアンダーソンの分析を想起しよう。西ローマ帝国崩壊後の西ヨーロッパはそれに次ぐ世界帝国をもつことがついになかったが、それは何故であるかというかれの問題提起はウォラースタインのと互いに接合する。ウォラースタインによれば帝国の再生は次の理由で否定されるのである。世界帝国は租税によって帝国内部から、また貿易独占によってその外部から、きわめて効率的な剰余の領有を保証されている。しかし、この領有のための装置——たとえば帝国官僚制——の維持費は過重である。そのような費用の負担がなければ資源は資本主義発展をまかないうるのに、その流れを、それが変えてしまう。いな、どのような形の経済成長にも適合しなくしてしまうのである。

しかし、単一の世界経済と単一の政治組織とが并存しているのでない——複数の世界経済のうちの一つに過ぎない「世界経済」——ような世界帝国は、国際的国家体制に拠点をもたぬかぎり、きわめて不安定なものとなる。国際的国家体制はまた、力の不均等な、数多くの、しかし余り多すぎない数の政治単位から成るものなければならない。数多くの国家があるばあいには、どの国家も世界経済の全体を支配するだけの強い力をもつことがない限り、資本主義の発展にとり国際的操作の余地が生まれる。周知のとおり、資本主義は多分に、(体制の) 隙間に根をおろして生まれてきたというべき歴史をもっている。封建制の裂け目のなかで育ってきたものである。ヴェニスのような大貿易都市は大地域にはさまれていた。そして、かれによれば、資本主義のいわば超国家的活動にとっては、このような国家体制のほうがチャンスが大きいのである。他面、この世界体制は国家体制でなければならない。なぜならば資本家にとり領

土内で一定の有利な交易条件を（たとえば重商主義的独占あるいは後でみるようなその他の方法で）確保するうえには国家権力が絶対必要だからである。そのみならず、国家の力は不均等でなければならない。すべての国の力が等しく強ければ、オランダやイギリスの商人のようなどこか外国に本拠をもつ超国籍事業体の活動を抑圧してしまふことができる。また平等に弱力であったならば、あるいは数が多すぎるならば——世界がバルカン化してしまったならば——全（世界）経済から蓄積した剰余を一つの、あるいは少数の国家へ集中する可能性が極端に小さくなるだろう。ヴェニスのようなところは、いうならば、小さすぎて、やがて資本主義の端緒を開くべき先行蓄積の基盤をつくり出せないものであったとってよかろう。

国家装置を通じて実現される剰余蓄積の社会的費用の問題。これについてはウォラースタインは大したことはしていない。しかし、帝国のばあいと比べて、一つにはこれらの国家装置のほうが弱力であり、また一つには成功的な国家は失敗した国家が蓄積した剰余の一部をちょうどオランダが、次いでイギリスが、スペイン帝国の蓄積した一部を手に入れたように領有できるだろうから、社会的費用は安かろうとの推論もなされよう。スペインがアメリカからとり入れた金銀は同国を通過して、結局はオランダとイギリスとを潤おしたのである。かように不均等な国家から成る体制は資本主義発展にたいして国際的に最上の好機会を与えることになる。さて、かれの続けるところによれば、かような国家は領土国家となり、次いで国民国家に転化してゆく運命にある。なぜならば、（ここにウォラースタインの議論の弱点がある。それについてここで云々はしないが、読者はかれがどうしてそのような結論に達したかを直観的に知るだろう。）「帝国においては、政治構造は文化を占領に結合させる傾向があるのに反して、世界経済における政治構造は文化を空間的立地と結びつける傾向を示す」（『源流』349ページ）からである。後者は局地的な国家構造が集団にとっては政治圧力として利用できる最初の点であることから起こる。局地的な権威者にたいしては反対圧力を加えることができる。しかし世界帝国では、たとえば北京とかローマは遠すぎて実際目的からみて政治上の有効な中心とはなりにくい。タス

カニとかベルギーならばなり易い。この点もまたこれから議論されねばならない。さらにまた、かような領土国家は部分利益を抑え、また国際的競争相手に対抗して政策を遂行してゆくうえに強力でなければならない。のみならず、下層階級にたいして、強制よりもむしろ階級双極化を阻止することによって、抑制を加えておくためにも、それだけの力をもたなければならない。このようにして、整理してみると、強力な絶対主義領土国家が世界の一角にあり、同時に他の一角には必ずしも強力ではなく、必ずしも領土的でなく、必ずしも絶対主義でもない国家が存在することが、「多数の中の一つ世界経済」の出現によって決定的に重要だということになる。15—18世紀の状況下においては、かような国家の大部分が封建絶対王政となるにいたったのも当然のことにすぎない。

## 5. 資本主義と帝国

この点で一方はアンダーソンの、他方はウォラースタインの、別々の分析が接合するのである。双方とも同一点に到達している。すなわち絶対王政が支配的となる時代は重要な段階を劃したものであり、それを經由して資本主義への道へ歩み出したのである。しかし、ヨーロッパ国家体制の出現を機能的に資本主義世界経済へ結びつける点でウォラースタインの見方のほうが有用である。アンダーソンはそうではなく、少なくとも私から見れば、満足できるほどのものではない。国家体制と資本主義世界経済とを結ぶ環を、アンダーソンではもちろん、とりあげていない。その環とは一つの世界経済としての唯一の世界経済である。——海外へ向かい、また大陸を横断して各方向へ膨脹したヨーロッパ体制、これである。アンダーソンの『系譜』には（索引だけみてかれこれいうのは間違いかも知れないが）植民帝国にかんする言及は一個所しかないがこれはおそらく偶然のことではなからう。これが一例である。じじつ、アンダーソンは16—17世紀に国際的な世界経済が存在したとは実際見ていないのである。——『系譜』の読み方が誤っていなければ、かれの立論はそうなのである。（196—7ページ）明らかにかれにはこうした議論を展開することができなかった。しか

し、これは研究すべき問題である。なお、ヒンダスとハーストの共著につき前に批評を加え、私がみるところではほとんど徒労な努力であると述べたが、かれらにたいし公正を失しないように一言付加しておくべきであろう。かれらもまた絶対主義国家が資本主義発展のために何故必要であったかを究めようとした。しかし、それが何故、移行期と照応しているかについての問題提起がない。すなわち、かれらの言葉を借りれば、「封建制から資本主義への移行が封建制の絶対主義的変種を母胎にしてのみ可能であった」(299ページ)のは何故か、についてかれらの議論はウォラースタインにくらべて甚だしく劣るものである。

両者の相違を別の形でみてみよう。ウォラースタインには二人の歴史家の影響がある。一人はフランスの歴史家フェルナン・ブローデルで、16世紀地中海にかんする偉大な業績を残している。もう一人のポーランドのマルクス主義者マリアン・マロウイストには国際的世界体制の構造ともいべき構想がある。発達した地域たい低開発地域、東ヨーロッパ先進国の植民地としてのポーランド、西ヨーロッパ先進国の外部植民地としてのアフリカおよびアメリカ植民地にかんし、じつに浩瀚な業績を挙げている。アンダーソンの『系譜』は、そのどちらも参照していない。『通路』にただ一個所ずつこの両歴史家の名が出てくるが、かれらの主題とした<sup>アーティキュレーテッド</sup>有節的世界体制をとりあげてはいない。かれはヨーロッパの各部分が、不均等発展の反面において制度の拡散、軍事的征服、各種の政治=社会的構成の、いわば混合によって、どのように政治的次元で連結されていたかを示す点できわめて鋭く自分の知るかぎりではじじつ、最も優れている。しかし、もっと厳密な意味における国際分業が、これらの諸部分を連結しているという感覚は、残念ながら、かれの著書においては見受けられない。

くどいようだが、もし『系譜』の196—7ページの個所を読みそこなっていないとしたならば、アンダーソンはヨーロッパ中心のがよる国際経済が16—17世紀に存在したとは信じていないようにさえ思える。ウォラースタインの論旨は、まさにかかる国際経済がこの2世紀間に形成されたという点にある。それ

はそれとして、二つの接近方法に違いはあるが、その何れを選べというのではなく、むしろ両者は互いに補足的なものであり、一方を粗略にするならば、それだけ議論を脆弱化するだろう。筆者が前に『ニュー・ステーツマン』に寄せたアンダーソンの書評の要旨をくりかえすならば、たとえばヨーロッパ封建制と日本のそれとの比較において相違は両者に共通な封建関係以外の要因によると考えねばならぬ。それはヨーロッパにあって日本では欠如していた古典古代の遺産でなければならないだろう。日本が鎖国により国境内部に発展を限定したのに反しヨーロッパは無限の対外膨脹を行ない、それが異質性を内包する地域経済を実現したというアンダーソンの見解は妥当でないように思う。妥当であったとしても一面的であることを免れず、そのため、もう一つの接近方法に着目することを妨げている。

終りにくりかえしていいたい。わたくしはアンダーソンのこの二部作にたいして、それ自体の価値よりも、むしろマルクス主義者の仲間うちで長年にわたり、いまでも続けられている論争が、その延長線上において産みだすべきゴースト・ブックを、こうした形で批判しておくべきだと思って、故意に厳しすぎる言葉を連ねてみた。その真意を著者も十分な諒解してくださると信ずる。あとはただ、読者自ら両著を繙くならばミリバンドがいつているとおりの高い評価を寄せるにちがいないというだけである。これはたいへんな業績である。マルクス主義の最も印象的な傑作である。著者に断るまでもないが、これほど高い敬意を払うべき著述にたいしても、なお批評を試みるのがマルクス主義者間では許されることであり望ましいことである。著者じしん、書中で古典をとりあげるとき、その模範を示してくれている。マルクス、エンゲルスに最高の尊敬を示しながらも批判的姿勢を崩してはいない。マルクス主義的研究を深めることで、いっその前進あるいは解明が遂げられると思ったとき、マルクス、エンゲルスも間違っていると思ったとき、かれにはそれを指摘するだけの心構えがある。それゆえ、わたくしのこの批判も正しく受けとめてもらえるだろう。読者各位にも同じことを切望する。

## 訳者注

- 1) エリック・J・ホブズボームは、ポーランド系ユダヤ人実業家を父（1931年歿）としオーストリア人を母として1971年アレクサンドリアに生まれ、ウィーン、ベルリン、ロンドン、ケンブリッジの各地で学び、現在ロンドン大学のバークベック・カレッジの経済社会史の教授である。著書には次のようなものがある。

*Labour's Turning Point 1880-1900* (London, 1948).

*Primitive Rebels, Studies in Archaic Forms of Social Movement in the 19th and 20th Centuries* (Manchester, 1959). 青木保編訳『反抗の原初形態』中央公論社、1971年。

[Francis Newton], *The Jazz Scene* (London, 1959). フランシス・ニュートン〔筆名〕、山田進一訳『抗議としてのジャズ』合同出版、1968年。

*The Age of Revolution, Europe 1789-1848* (London, 1962). 安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命』岩波書店、1968年。

*Labouring Men, Studies in the History of Labour* (London, 1964). 鈴木幹久・永井義雄訳『イギリス労働史研究』ミネルヴァ書房、1968年。

*An Introduction to Karl Marx, Precapitalist Economic Formation, translated by J. Cohen* (London, 1964). 市川泰治郎訳『共同体の経済構造』未来社、1969年。

*Industry and Empire, an Economic History of Britain, 1750 to the Present Day* (London, 1968).

*Captain Swing* (with G. Rudé) (London, 1969).

*Bandits* (London, 1969). 斎藤三郎訳『匪賊の社会史』みすず書房、1972年。

*Revolutionaries, Contemporary Essays* (London, 1973). 斎藤孝ほか共訳（Ⅰ）『革命家たち』（Ⅱ）『反乱と革命』未来社、1978年、1979年。

*The Age of Capital 1848-1875* (London, 1975).

このほかにイタリア共産党のG・ナポリターノとの対話 Giorgio Napolitano, *Intervista sul PCI a cura di Eric J. Hobsbawm* (Roma-Bari, 1976) (山崎功訳『イタリア共産党との対話』岩波書店、1976年)がある。

- 2) 以上の単行本となっているかれの著述をイギリスにおける社会史、とくにホブズボームが鼓吹している社会史を標準にとって分類し、それによりかれの研究の焦点を明らかにしようとしている安川悦子（「ヨーロッパからの発題」『歴史評論』1979年12月号）によると、次のようにこの社会史の枠組が4つの側面にわけられる。まず、「いささか強引な見方ではあるが、イギリスにおける『社会史』の現在の研究状況を反映し、同時にホブズボームの考えている『社会史』の枠組みをあらわしているといえる」とことわったうえで第1に、「民衆の日常生活・風俗や習慣

といったもので、民俗学やあるいは風俗史などであつかわれてきた人間のさまざまな行動の側面。第2、「諸革命、あるいは反乱や騒擾など、いってみれば民衆運動と総称される側面」。第3、「社会経済史的な側面とでもいうか、あるかぎられた地域における社会構造の変化を経済に重点をおいてとらえようとする側面」および第4、「民衆運動の思想的特質、指導者の思想と民衆の思想といったいわゆる社会思想史的な側面」であるという。さらにこの4つの側面がどのような関係において「社会史」という枠組みをくみだしていると考えられているのかと設問しているが、しかしここではこれ以上は進まないでこの4つの側面から安川がホブズボームの「龐大な著作群を整理してみると、さきあげた「社会史」の4つの系列に分けることができる」としているところを紹介しておく。それによれば第1の系列は、かれの研究の出発点でもあったイギリス労働史研究に属するもので、史料集『労働の転換点1880—1900』（1948年）や『働らく人々』（1964）などがそれに属し、かれの学位論文である「フェイビアン主義とフェイビアン協会」もこの系列に属する。第2の系列は、民衆運動史研究に属するもので、『原始的な反乱者たち』（1959）に加わって、『匪賊』（1969）や、リュデとの共著『キャプテン・スウィング』が入る。第3の系列は、第1と第2の系列の研究主題が作用する磁場ともいべきものの研究である。経済史を中心にしたグローバルな世界史記述で、『革命の時代』（1962）、『産業と帝国』（1968）、『資本の時代、1848—1975』（1975）などがそれに属する。第4の系列は、マルクス主義思想、あるいは知識人論、前衛党論など、主として思想史研究に属するもので、『革命家たち』（1973）に収録された諸論文がそれである、と安川はこの最後の系列をもって第1から第3の系列の研究を支えるかなめに位置するもので、「このかなめは、ホブズボームの多方面にわたる『社会史』研究を究極のところ結びつけているかれの問題意識でもあった。かれが一貫して追求しつづけている主テーマである社会革命の問題、すなわち変革の主体形成と変革運動の力学とでもいべき問題にたいするかれの『思い入れ』がこの第4の系列の中で鮮明にうかび上ってくる。」と力点を打っている。

- 3) しかし社会史の枠組という観点を離れ社会史提唱も含むかれの全研究業績を眺めるとかれの研究の焦点にはもう一つ重要な主題が浮びあがってくる。見方によってはむしろこの主題が最も大切でありかれの中心課題ではないかと思われる。それは年代順に次のように区分した場合1950年代からあらわれ、その後最近の「歴史的脈絡における資本主義の危機」と題する優れた分析を含み持続的に事あるごとに問いかえされているもので、およそ社会体制はどのような移行法則に服しているか、その歴史法則の追求である。いうまでもなくきわめてポレミックな実際的な問いである。

かれの著作歴は1948年の労働史論 *Labour's Turning Point* に始まる。かれ自

身のちに語るところによれば、けっして労働史専攻を志したわけではなく当初は北アフリカの農民問題の研究を企てたが間もなく軍隊へ召集され、軍隊生活のなかでは「第三世界問題」に必要な準備的な読書の機会がなかったことと、やがて結婚し新妻を残してアルジェリアへ行く決心がつかなかったことの2つの理由からそれを断念し、結局軍隊にいても予備的に文献を読む機会のあるフェビアン運動を選びそれで学位論文を書いたという。しかしかれは労働者階級の歴史を運動の指導者や組織の歴史にしてしまう従来の制度史的傾向に満足せず、このような歴史は一方では神話を創り他方では現実の事情に遠慮する余り公式の組合史、政党史もまた書けないような状態に陥らせていると批判する。1948年に前出『労働の転換点』の編纂をまとめたときに、これがそのまま、かれ自身の転換点につながった。同時にかれのなかには本来のプロレタリアに近い不熟練労働者の組織たる19世紀後半の新組合主義にたいする関心が明瞭な形をとっていた。労働者階級の生活状態そのものにたいする興味は、その後 *Labouring Men* に収められたいくつかの論文のうちに反映している。しかし、かれはマルクス主義歴史学者が近代労働運動史に集中して歴史の他の分野をおろそかにすることを極力警戒している。1978年の春と夏にバーベック・カレジの同僚たちとのインタビューで語ったなかでも、こういつている。「1960年代後半以来新左翼<sup>ニューレフト</sup>マルクス主義の発展は一部において19—20世紀の労働運動に焦点を絞っているように思われる。制度的組織的形態が問題にされている。そのためにその他の歴史の大部分を非マルクス主義の手へ委ねることになっているが、それは余り善いこととは信じられない。25年前にわれわれがマルクス主義歴史家の集団を形成したときは労働史が中心であったが古典古代、中世封建制、イギリス革命などあらゆる問題の歴史家もいた。……現段階のマルクス主義歴史には急進主義労働史の同義語みたいなものになる危険があり、これは指摘されねばならない。」(*Radical History Review*, 19 Winter, 1978-79, p.124) この25年前につくった研究集団というのはかれがクリストファ・ヒルらマルクス主義歴史家たちとともに1952年に発刊した史学誌 *Past and Present* の母胎となったものを指しているのであろう。かれはこのころ、遡て近代資本主義生誕の歴史的秘密に挑戦の情熱をもつにいたっていたようである。当時モーリス・ドップとスウィージーの間に展開されていた資本主義移行論争（わが国では高橋幸八郎が参加）論集として公刊された1954年に「17世紀の全般的危機」と題する長論文を *Past & Present* 誌第5,6号へ発表（わが国ではこの論文とトレヴァー＝ローパー論文を中心に今井宏の訳編『17世紀危機論争』創文社、1975年がある。）するが、体制移行という主題はこの後つづいて今日にまでまもっている。今井宏はこの論文の要旨を「訳者あとがき」で十分に紹介したのち、その後同誌が1957年に同じ17世紀の諸革命について行った討論会の模様も概述している。17世紀危機論争はその後もつづけられているが、ホブズボ



ームの関心は17世紀のみにはとどまっていなかった。かれは、最近においては『全般的危機』をもっと広くとりあつかう。それは「一体制の進化における再構造化」の時期として、社会構造における特殊の一回限りの、あともどりのない歴史の一時期として捉える。いいかえれば危機は体制変革のそれである。かれにとり primitive rebels も bandits も、かような変革の担い手としての適格性を検証されるべきものとして著作中に登場してくるのである。

*The Age of Revolution* の二重革命時代もその観点からつかまれる。かれにとっては *The Age of Capital* は平板なつまらない時代であった。( *The Age of Capital*, p. 6) 「もう一つの革命危機期が20世紀初め以来進行しているとかれはみている。」(James Cronin, *Creating a Marxist Historiography*, *Rad. Hist. Rev.*, *opt.*, *cit.*, p. 103) その点からスターリンによって抹殺されたコンドラチェフ＝トロツキーの長期波動論争にも関心を寄せ、かれ自身の資本主義発展の上下降交代の表式を作成して時代区分の基準をそれに求めている。( *The Crisis of Capitalism in Historical Perspectives*, *Socialist Review*, IV-4, 1976) (*An Introduction* ではこれもスターリンの犠牲になった「アジア的生産様式」の復権にも努めている。)

- 4) ここに翻訳権を与えられて訳出したのは同じ線上において資本主義移行にかんしマルクス主義歴史学上にあらわれた2つの注目すべき著作、1つはペリー・アンダーソンの二部作、*Lineages of the Absolutist State* (London, 1974), *Passages from Antiquity to Feudalism* (London, 1974) ともう1つはアナル学派のイマニエル・ウォラースタインの *Origins of the Modern World-System*, New York, 1974. をとりあげた書評によせかれ自身の見解の一端も示したものである。かれ自身さきの会見談のなかで次のようにいっている。「マルクス主義歴史学における最近の主たる趨勢は遙か以前の論議を復活させる方向を示している。それは一般的には社会経済構成の幅広い性質にかんする論議であり、特殊的には封建制から資本主義への移行にかんするものである。戦争が終った直後にドップの『資本主義の発展』の公刊とともにマルクス主義の焦点をなしたものであり、間もなくドップ＝スウィージー論争を呼んだがここ数年の間にペリー・アンダーソンおよびイマニエル・ウォラースタインがこの主題を再びとりあげた。それだけにとどまらずアメリカではロバート・ブレンナーなどがこれに貢献している。やがてはマルクス主義者の間だけではなく広くアカデミックな歴史にも拡がってくると思う。後者でもこれが真の、そして決定的な問題であることをますます再認しつつある。」(p. 124.)

- 5) 原論文はイギリス共産党歴史部会の機関誌 *Our History*, 66, Summer 1976 に収められたもので、原題 *Feudalism, Capitalism and the Absolutist State*, re-

views by Eric Hobsbawm & Douglas Bourn の前半であるが内容を考えて訳文の表題を資本主義と近代国家とした。後半は別に掲出する。訳文は逐語のものになることを避け、また文義を明らかにするためには補筆することを躊躇しなかった。ただし暫定稿とする。